



Profile—依田麻子

広島大学総合科学部助手、日本大学文理学部助手、職業能力開発大学校福祉工学科専任講師、日本大学文理学部専任講師、助教授を経て現職。専門は生理心理学・健康心理学。著書は『心理学概説：心理学のエッセンスを学ぶ』（分担執筆、啓明出版）など。

すでに30年以上前の留学経験を、このように書かせていただくことになるとは思ってもおらず、あの1年間は、何だったのか、その後の私にどのような影響があったのか、執筆依頼をいただいてから、考えておりました。

1982年6月からちょうど1年間、イリノイ大学大学院に学生として滞在しました。留学したのは博士前期課程の2年目でした。なぜ、その時に留学したのか。正直なところ、しっかりした理由はありませんでした。前期課程に入ってすぐ、たぶん6月の初め、大学の掲示板で大学院交換留学生制度があることを偶然知りました。とても恵まれた（お得な）条件でした。しかし、留学準備を全くしていなかった当時の私は、落ちるに決まっていると思っていたので、留学生試験を気楽に受けてしまいました。そして、受け取った合格通知。たぶん、10月ごろだったかと思いますが、その時は心底焦りました。

ここまで、読んでいただいた方にはお分かりでしょうが、研究者

大学院交換留学生としての University of Illinois の日々

日本大学文理学部 教授

依田麻子（よだ あさこ）

の卵としての自覚を持った留学とは全く言えない、恥ずかしい限りの留学だったと思います。大急ぎで、英語の留学基準をクリアし、慌ただしく留学することになったのですが、私の考えとは裏腹に、イリノイ大学大学院では、研究者の卵として、しっかり受け入れてくださいました。

当時のイリノイ大学心理学部の学部長は、事象関連電位に関する文献には必ず出てくるドンチン先生でした。私の卒業論文が心臓血管系反応に関する内容だったため、生物心理学部門（Biological Psychology Division）の認知精神生理学研究室（Cognitive Psychophysiology Lab）に所属させていただきました（当時のイリノイ大学の組織と現在とは異なります）。そこはドンチン先生の研究室だったのです。また、研究指導はコーズ先生でした。コーズ先生はイリノイ大学に勤務する前は、心臓血管系の指標を使った研究をされていた関係で、私の指導担当になってくださったのだと思います。

当時も、そして今も、事象関連電位の最先端の研究をしている研究室に所属させていただいたわけです。自分の研究テーマとは異なっていたものの、まだ大学院で1年程度過ごただけで、ほとんど学部生程度の経験と知識しかなかった私にとって、見るもの聞くもの全てが興奮する内容でした。ミネソタで開催された Society for Psychophysiological Research の大会にも他の院生とともに出席させていただきました。また、研究

員ではなく大学院生ですから、大学院の授業も受講し、単位も取得しなければなりません。これは、大変なことでしたが、だからこそ、イリノイ大学での学生生活も体感できたのだと思います。

研究室には留学生が沢山いました。イタリア、イスラエル、イギリス、など。アジアからは私一人でしたが、留学生が多かったためか、研究室のメンバーはとても自然に接してくれました。ファビアさんとグラットンさんは私より少し前にイタリアから留学してきた大学院生で、イリノイ大学で学位取得後、他の大学で仕事をされ、現在はお二人ともイリノイ大学の教授です。Psychophysiology の論文や専門書で必ず見かける先生方から直接ご指導いただき、優秀な研究室メンバーに囲まれ、最先端の研究に接することができ、なんとも贅沢な日々でした。

研究室のメンバーは、自分の研究に誇りをもち、とても楽しそうに研究に取り組んでいました。そのような中、自然と、研究は楽しいのだ、ということ留学前よりも強く感じるようになりました。留学以前の私は、博士前期課程修了後の進路ははっきりしていませんでした。しかし、留学後の私は研究を少しでも長く続けたいと思うようになり、後期課程への進学を躊躇うことはありませんでした。

留学をした動機はあいまいでしたが、留学経験は私の将来に大きな影響をもたらすことになったのだと、若き日々を振り返らせていただきました。